

令和元年度  
出雲市文化財調査報告書

東原遺跡  
上塩治横穴墓群  
(第3支群・第40支群)

2020年3月

出雲市教育委員会

令和元年度  
出雲市文化財調査報告書

東原遺跡  
上塩治横穴墓群  
(第3支群・第40支群)

2020年3月

出雲市教育委員会



# 序

本書は、個人事業主から依頼を受けて2016（平成28）年度に実施した、集合住宅新築工事に伴う東原遺跡の発掘調査、島根県出雲県土整備事務所から依頼を受けて2017・2018（平成29・30）年度に実施した、県道改良工事に伴う上塩治横穴墓群の工事立会調査・不時発見時発掘調査の記録を収録した報告書です。

東原遺跡は、出雲市知井宮町に所在する弥生時代から続く集落遺跡で、市内を代表する弥生時代集落の一つ、知井宮多聞院遺跡が隣接しています。上塩治横穴墓群は、上塩治町に所在する古墳時代の遺跡で、総数236基もの横穴墓が発見された県内最大の横穴墓群です。いずれの遺跡も文化財的な価値は高く、今回の調査成果が、出雲地域の歴史を解明していく上で貴重な資料の一つとして活用されることが期待されます。

本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査と報告書作成にあたりご協力いただきました関係者の皆様に厚くお礼申しあげます。

2020（令和2）年3月

出雲市教育委員会

教育長 横野 信幸



## 例　言

- 本書は、2016(平成 28)年度に出雲市教育委員会が実施した、集合住宅新築工事に伴う東原遺跡の埋蔵文化財発掘調査及び 2017・2018(平成 29・30)年度に実施した県道出雲三刀屋線上塩治工区道路改良工事に伴う上塩治横穴墓群の埋蔵文化財工事立会調査・発掘調査の成果をまとめた報告書である。
- 調査は下記の体制、期間で実施した。

### ○東原遺跡発掘調査

調査地及び調査面積　島根県出雲市知井宮町 404 番 1 約 20m<sup>2</sup>

調査期間　2016(平成 28)年 11 月 21 日～11 月 28 日(発掘調査)

調査体制 <2016(平成 28)年度>

事務局　花谷 浩(出雲市市民文化部 学芸調整官)

佐藤隆夫(同 文化財課課長)

穴道年弘(同 文化財課課長補佐兼埋蔵文化財 1 係係長)

調査員　須賀照隆(同 文化財課主任)

調査補助員　伊藤貴夫(同 文化財課臨時職員)

発掘作業員　岡田光司　奥田利晃

### ○上塩治横穴墓群第 40 支群 35・36 号横穴墓工事立会調査

調査地及び調査面積　島根県出雲市上塩治町 2985 番 1 約 35m<sup>2</sup>

調査期間　2018(平成 30)年 1 月 9 日～1 月 29 日(工事立会調査)

調査体制 <2017(平成 29)年度>

事務局　佐藤隆夫(出雲市市民文化部 文化財課課長)

穴道年弘(同 文化財課課長補佐兼埋蔵文化財 1 係係長)

調査員　須賀照隆(同 文化財課主任)

調査補助員　加藤章三(同 文化財課臨時職員)

### ○上塩治横穴墓群第 3 支群 20 号横穴墓発掘調査

調査地及び調査面積　島根県出雲市上塩治町 2975 番 2 2975 番 3 約 10m<sup>2</sup>

調査期間　2019(平成 31)年 2 月 13 日～2 月 28 日(発掘調査)

調査体制 <2018(平成 30)年度>

事務局　木村 亨(出雲市市民文化部 次長兼文化財課課長)

調査員　景山真二(同 文化財課課長補佐兼埋蔵文化財 1 係係長)

須賀照隆(同 文化財課主任)

発掘作業員　大輝正人　星野篤史

調査指導　勝部智明(島根県教育庁文化財課主幹)

3. 本書はの執筆と編集は、職員の協力を得て須賀が行った。
4. 本書に掲載した出土品の実測は、須賀、加藤、吉村香織（臨時職員）が行った。
5. 図面・遺物の整理作業は須賀、荒木恵理子（室内整理作業員）が行った。
6. 本書に掲載した写真は、上塙治横穴墓群第3支群現地を景山が、その他を須賀が撮影した。
7. 本書に掲載した遺物及び実測図、写真は出雲市文化財課が保管している。
8. 本書で使用した方位は、座標北を示す。座標は、世界測地系第III系に基づくものである。標高は海拔高を示す。
9. 本書で使用した遺構略号、横穴墓の遺構内名称、形態名称は以下のとおりである。

SD - 溝 SK - 土坑

横穴墓各部位の名称及び方向は右図のとおりである。天井形態については、玄室奥壁と側壁の境界部が明瞭で奥壁が垂直ぎみに立ち上がり、断面形が半円形を呈するものをアーチ形天井とする。玄室側面に軒線があり、断面形が方形を呈するものを平天井とする。玄室側面に軒線があり、天井部を家形に加工するものを家形天井とする。

10. 本書を作成するにあたり、編年及び過去の調査については、下記の参考文献を利用した。

#### 【編年参考文献】

○弥生土器（松本編年）

松本岩雄 1992「出雲・隱岐地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社

○須恵器（出雲編年）

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域性」『島根考古学会』第 11 号 島根考古学会

大谷晃二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳』平田市埋蔵文化財調査報告第 8 集 平田市教育委員会

○須恵器（石見編年）

岩本真実 2019「石見地域における須恵器の編年と地域性—「石見型須恵器」再考—」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集第 22 集 島根県古代文化センター

大谷晃二 1998「原始・古代の石見」『八雲立つ風土記の丘』No.147・148・149 合併号 島根県立八雲立つ風土記の丘

柳原博英 2008『史跡 周布古墳・藏地宅後古墳・市史跡金田 1 号墳』浜田市教育委員会

柳原博英 2008『藏地宅後古墳』浜田市教育委員会

#### 【既刊報告書等】

○東原遺跡

出雲市教育委員会 1989『神門地区遺跡詳分布調査報告書』

○上塙治横穴墓群第 40 支群

出雲市教育委員会 2016『上塙治横穴墓群第 40 支群』県道出雲三刀屋線上塙治工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1 出雲市の文化財報告 32

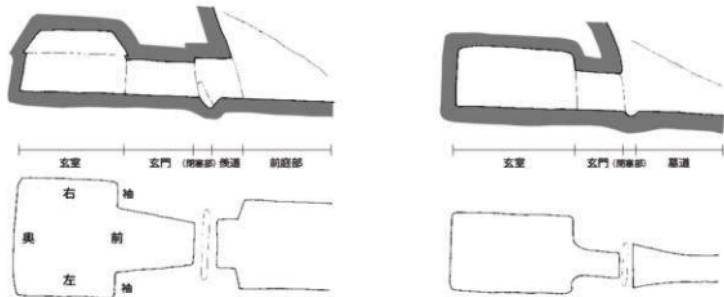
○上塙治横穴墓群第 3 支群

池田満雄 1956「上塙治地区的横穴」『出雲市の文化財 出雲市文化財調査報告』第 1 集 出雲市教育委員会

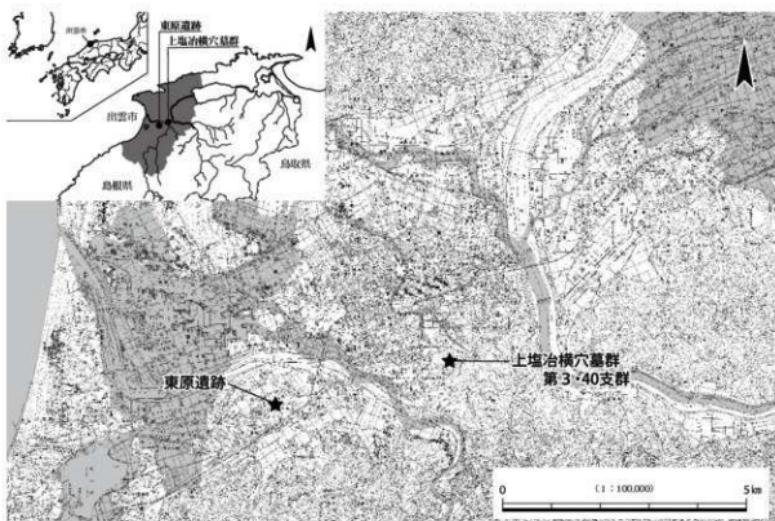
門脇俊彦 1980「上塩治横穴墓群」『上塩治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』島根県教育委員会ほか

出雲市教育委員会 2018『上塩治横穴墓群第3支群』県道出雲三刀屋線・塩治工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調

査報告書2 出雲市の文化財報告36



横穴墓各部位名称（模式図）



調査地の位置 ※網掛けは弥生時代の推定水域

# 本文目次

第1章 東原遺跡の調査	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 遺跡の位置と環境	1
第3節 調査の成果	2
第4節 結語	8
第2章 上塩治横穴墓群の調査	10
第1節 調査に至る経緯と経過	10
第2節 遺跡の位置と環境	12
第3節 第40支群35・36号横穴墓の調査	13
第4節 第3支群20号横穴墓の調査	20
第5節 結語	22

## 挿図目次

第1図 調査地位置図	2	第10図 第40支群35号横穴墓遺構実測図	17
第2図 遺構実測図	3	第11図 第40支群36号横穴墓遺構実測図	19
第3図 SD1遺物出土状況実測図	4	第12図 第3支群20号横穴墓遺構実測図	21
第4図 遺物実測図1	6	第13図 遺物実測図	22
第5図 遺物実測図2	7	第14図 第3・40支群横穴墓配置図	23
第6図 東原遺跡周辺の調査状況	8	第15図 第3・40支群における横穴墓の時期と形態	
第7図 上塩治横穴墓群と周辺の後期古墳分布図	12		24～25
第8図 遺構配置平面図	14～15	第16図 第3・40支群の埋葬施設模式図	27
第9図 遺構配置立面図	16		

## 挿表目次

第1表 第3・40支群横穴墓主要要素一覧表	26
-----------------------	----

## 写真図版目次

図版1 東原遺跡 実測状況	図版5 上塩治横穴墓群第40支群
東原遺跡 SD1	35号横穴墓 玄室内配石状況
図版2 東原遺跡 出土土器1	35号横穴墓 閉塞状況
図版3 東原遺跡 出土土器2	36号横穴墓 遺物出土状況
図版4 上塩治横穴墓群第40支群	上塩治横穴墓群第3支群
35・36号横穴墓 実測状況	20号横穴墓 玄門・玄室
上塩治横穴墓群第3支群	図版6 上塩治横穴墓群 出土土器
20号横穴墓 実測状況	

# 第1章 東原遺跡の調査

## 第1節 調査に至る経緯と経過

個人事業主が計画する集合住宅新築工事予定地が、周知の埋蔵文化財包蔵地「東原遺跡」の範囲内に及ぶことから、2016（平成28）年9月21日に範囲確認調査を実施した。範囲確認調査の結果、全てのトレンチで遺構・遺物を確認したことから、施工責任者である大東建託株式会社松江支店を通じて事業主体者と協議を重ね、同年11月21日から発掘調査を実施することが決定した。

本発掘調査は、遺跡への影響が大きいと判断した合併浄化槽埋設範囲約20m<sup>2</sup>のみを対象とし、全て手掘りによって調査を進めた。同年11月28日には現地調査が全て終了し、同年12月1日付けで島根県教育委員会と遺跡の取扱協議を行った結果、遺跡の記録保存が決定した。

### 東原遺跡の調査に関する主な文化財保護法上の文書

2016（平成28）年

8月24日 「埋蔵文化財発掘の届出について」事業者から市教委へ

10月12日 「埋蔵文化財発掘の届出について（進達）」市教委経由で県教委へ

10月12日 「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」県教委から市教委経由で事業者へ

11月11日 「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委から県教委へ

12月1日 「出雲市知井宮町地内集合住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委へ

12月1日 「遺跡の取り扱いについて（回答）」県教委から市教委へ

12月1日 「埋蔵物発見届」市教委から出雲警察署へ

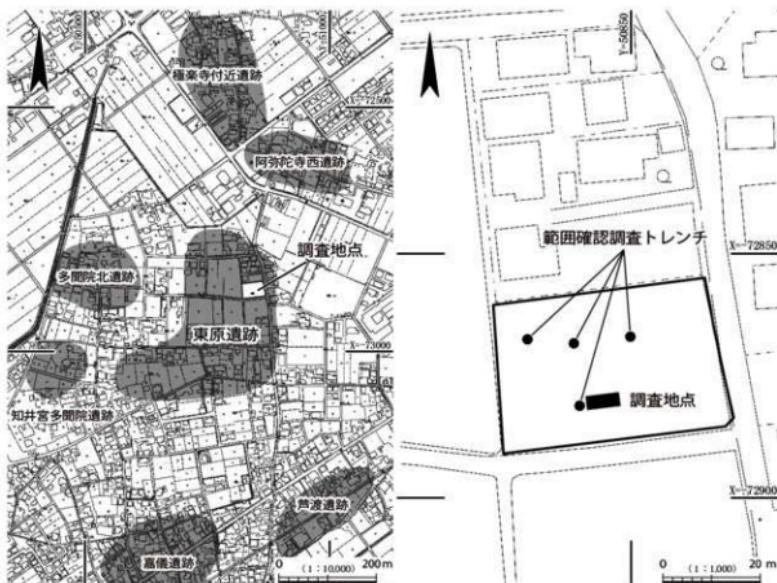
12月1日 「埋蔵文化財保管証」市教委から県教委へ

12月27日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」県教委から市教委へ

## 第2節 遺跡の位置と環境

東原遺跡は出雲市知井宮町地内に所在する集落遺跡である。出雲平野南部、神戸川左岸の沖積地上に位置する。弥生時代には、遺跡西方に大きく広がる潟湖と湿地帯が存在したと推定され、現在とは大きく異なる景観が広がっていたと考えられる（例言位置図・高橋2011）。

遺跡の周辺には、弥生時代の貝塚を作った集落遺跡として知られている知井宮多聞院遺跡をはじめ、多くの集落遺跡・散布地が存在する（第1図）。知井宮多聞院遺跡については、1958（昭和33）年の明治大学による発掘調査等、数次の調査が行われているが、貝塚以外の遺構は明らかでない。東原遺跡を含め、その他の遺跡については弥生時代以降の遺物散布が確認されているのみであり、詳細不明である。



第1図 調査地位置図

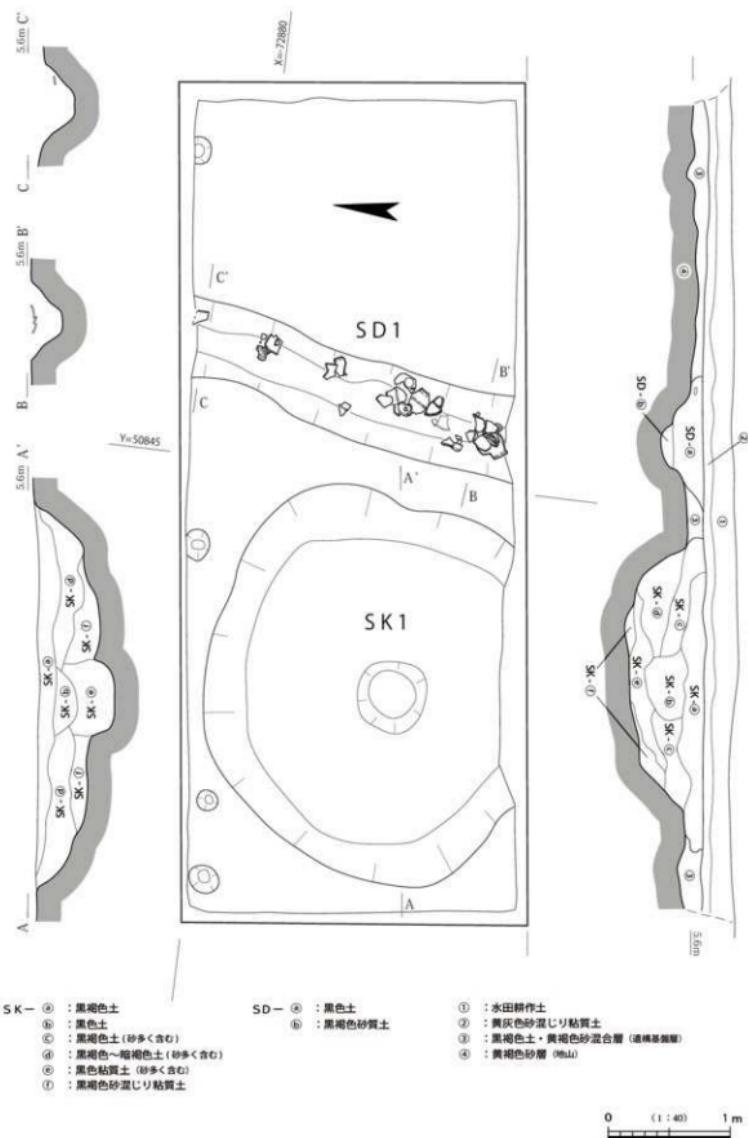
### 第3節 調査の成果

#### 1 調査の概要（第2図）

工事予定範囲のうち、遺跡への影響が大きい合併浄化槽部分約20mを対象に発掘調査を実施した。調査は、手掘りによって徐々に掘り下げ、層位的に遺構・遺物の検出を行った。確認した遺構は弥生時代中期後葉の溝1基（SD1）、時期不明の大形土坑1基（SK1）、ピット4基である。

今回の調査地点における基本的な層序は、上層から①水田耕作土②黄灰色砂混じり粘質土③黒褐色土・黄褐色砂混合層④黄褐色砂層の順に堆積を確認した。①②層は、耕作等の擾乱を受けた土層と思われる。いずれの土層においても弥生時代中期後葉～古墳時代初頭頃の土器片と近世以降の陶磁器片が混在して出土している。③層は、遺構基盤層である。不均一な土層であるが、遺物は確認できなかった。調査区内で検出した遺構は、全て③層を基盤層としている。④層は、河川等に伴う自然堆積砂層と思われる。遺構・遺物共に確認できなかった。標高は、調査時の地表面が約5.95m、遺構面③層上面が5.7m前後、④層上面が5.6m前後である。

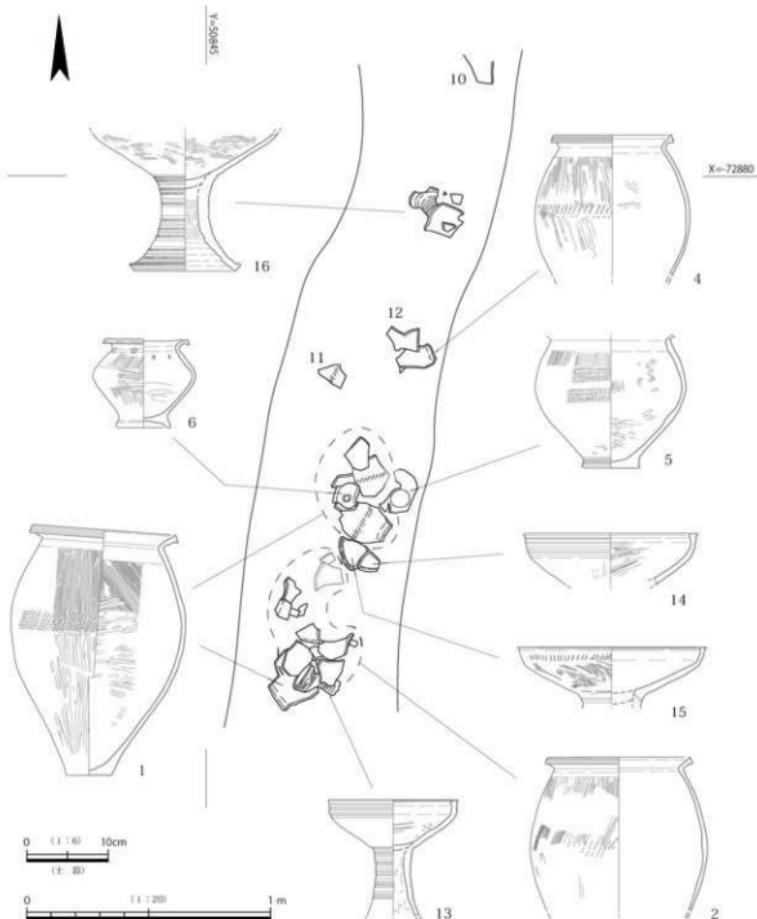
なお、③層上面においては遺構検出が困難であったため、遺構の面的な検出は全て④層上面まで掘り下げて行った。遺構図についても、④層上面における検出平面形を図示したものである。



第2図 遺構実測図

## 2 遺構

**溝 SD 1 (第2・3図、図版1)** SD 1は、調査区中央部のやや東寄りで検出した、南北方向に伸びる溝である。検出幅約70cm、深さ約25cmを測るが、調査区壁面の土層観察では、本来幅95cm以上、深さ35cm以上の溝であったことが確認できる。溝底のレベルについては、調査区南端で標高5.35m、調査区北端で標高5.20mを測り、南から北へ向けて徐々に低くなっている。



第3図 SD 1 遺物出土状況実測図

溝内堆積土上層の黒色土中からは大量の弥生土器が出土した。その出土状況は面的であり、同一時期にまとまって廃棄されたものと考えられる。

出土した弥生土器の時期は全て弥生時代中期後葉の範疇で捉えられるものであり、遺構の時期も同様と考えられる。

**土坑 SK 1 (第2図、図版1)** SK 1は、調査区西側で検出した円形土坑である。直径3.3m前後、深さ約60cmを測り、そのほぼ中央に直径約60cm、深さ約15cmの掘り込みが存在する。土層堆積状況から、中央部掘り込みは遺構内堆積土SK-①層上面から掘削されたことが確実である。また、遺構内堆積土SK-②③層上面からも地山面に達しない掘り込みが確認できる。

土坑内からは弥生時代終末期の資料を含む少量の上器片を確認したが、遺構の規模に比して極めて僅少であり、混入品である可能性が高い。遺構の時期・性格共に不明である。

**ピット (第2図、図版1)** 調査区北端沿いに4基のピットを検出した。いずれも直径25cm以下、深さ20~30cm程度の規模である。遺構内堆積土は黒褐色土1層のみであり、SK 1最上層と類似している。遺物は出土しておらず、時期についても不明である。

### 3 遺物

**溝 SD 1出土遺物 (第4・5図、図版2・3)** 1~16はSD 1から出土した土器である。

1~4、8~12は甕である。基本的に口縁拡張部に2~3条の凹線文が、体部最大径付近に列点文が施される。体部の調整は、外面上半部ハケメ・下半部タテミガキ、内面上部ハケメ・中~下部ヨコミガキを基本とするが、12の体部片については内面にケズリが施されている。

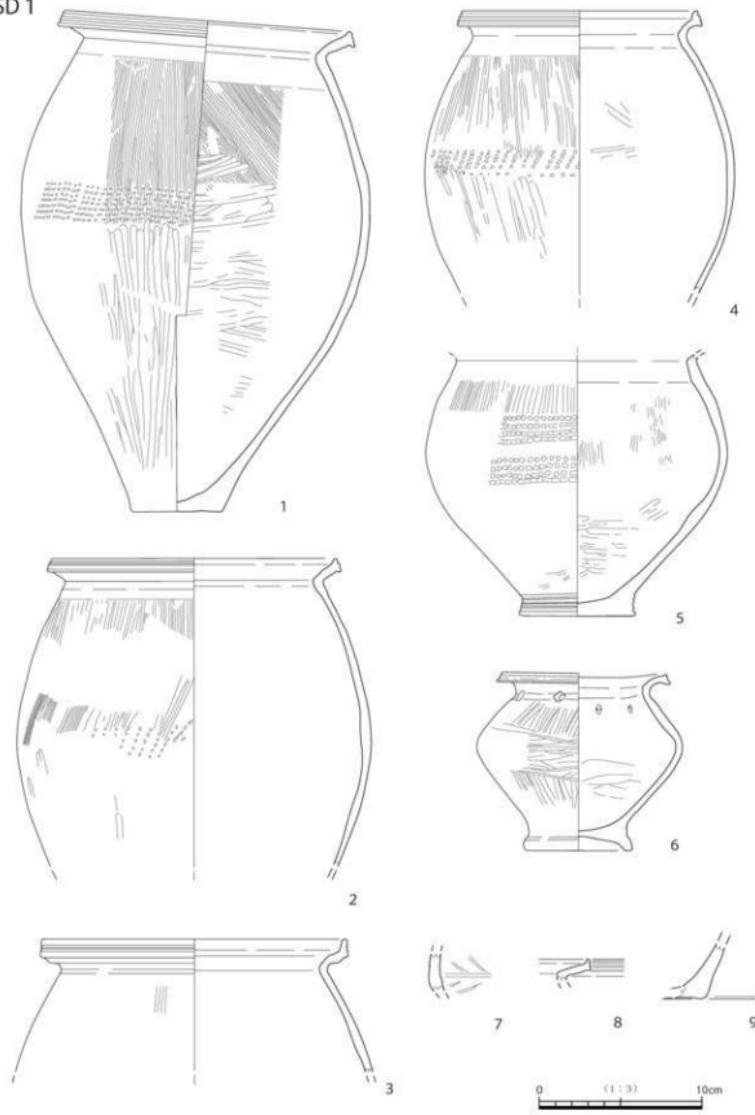
5は鉢の頸部~底部である。体部最大径付近に2段の列点文が、底部外面に4状の凹線文が、施される。体部の調整は、外面上部ハケメ・下部ヨコミガキ、内面上部ハケメ・下半部ヨコミガキが施される。

6は小型脚付壺である。頸部に2孔一対の円形穿孔が施され、内済する低い脚を持つ。口縁拡張部にはやや不明瞭な凹線が1条廻る。体部の調整は、外面最大径付近ヨコミガキ・上下部タテミガキ、内面粗いナデが施される。

7は壺頸部のと推定される破片で、外面にヘラ描き有軸羽状文が施される。

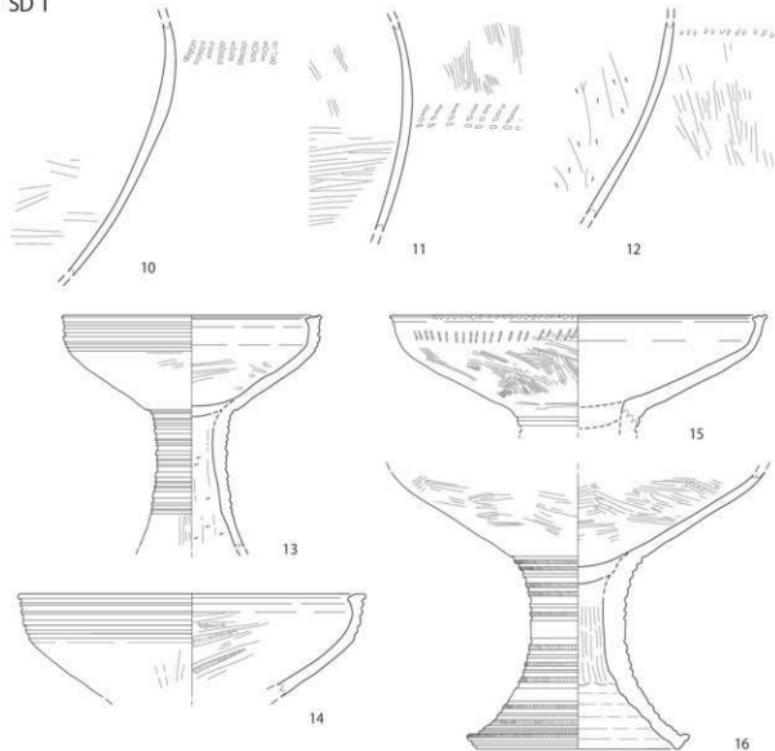
13~16は高杯である。13は脚端部以外ほぼ完形の個体である。口縁端部に2条の凹線文、口縁外面に5条の凹線文、脚部外面に16条の凹線文が施される。調整は脚部内面ケズリ、杯部内外面・脚部外面ミガキが施される。14・15は杯部の破片である。14は口縁外面に5条の凹線文が施される。調整は杯部外面ミガキ、内面ハケメ後ミガキが施される。15は口縁端部に2条の凹線文、口縁端部付近外面に刻目文、口縁外面に板条工具による刺突文、脚部に凹線文が施される。調整は杯部外面にハケメが残るが、ハケメ上から単位不明瞭なミガキも施されている。16は杯部中位~脚部の破片で、脚部はほぼ完形となる個体である。脚部外面に上段8条・中段6条・下段6条の凹線文が、脚端部に2条の凹線文が、凹線間に11条の刺突文が施される。調整は杯部内外面ミガキが施される。

SD 1

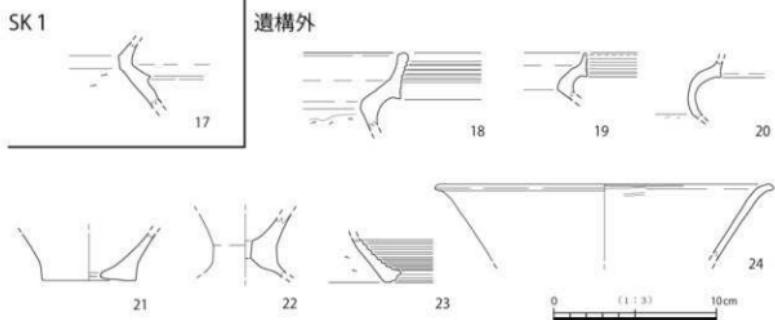


第4図 遺物実測図1

SD 1



SK 1



第5図 遺物実測図2

S D 1 出土土器は、全て松本IV様式の範疇でとらえられるものであり、時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

**土坑 S K 1 出土遺物（第5図、図版3）** 17はS K 1から出土した鼓形器台筒部の破片である。脚部外面にナデが、脚部内面にケズリが施される。松本V-4様式に相当し、時期は弥生時代終末～古墳時代初頭と考えられる。必ずしも遺構の時期を示すものではない。

**遺構外出土遺物（第5図、図版3）** 18～24は遺構外出土土器である。18～20は甕の口縁部で、18・19は口縁外面に凹線文が、18・20は頸部以下内面にケズリが確認できる。

21・22は甕等の底部で、22には脚が付く。いずれも底部に円形の穿孔が施される。23は高杯等の脚部で、外面と端部に凹線文が、内面にケズリが施される。24は鼓形器台の受部で、外面ナデ、内面ミガキが施される。

時期は、23がIV様式で弥生時代中期後葉、18・19が松本V-1・2様式で弥生時代後期前葉～中葉、24が松本V-4様式で弥生時代終末～古墳時代初頭と考えられる。

## 第4節 結語

### 1 調査のまとめ

今回の発掘調査では、弥生時代中期後葉の溝1基と時期不明の土坑1基、ピット4基、弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の土器を確認することができた。

溝S D 1 内を除き、出土遺物は極めて少なかったが、水田面から遺構面までの比高差が非常に浅く、本来の遺物包含層・遺構面が既に削平されていることに起因するものであろう。溝S D 1内の出土土器の密度は非常に高く、相当数の人々の営みがあったものと考えられる。

また、出土遺物内に高杯の比率が非常に高いほか、遺構外出土遺物で確認した甕底部片2点は両とも底部穿孔土器である。埋葬や祭祀に用いられることの多いこうした土器の比率の高さは、今回の調査地点が集落の中でも埋葬や祭祀の場として利用されたエリアであったことを示すものではないだろうか。

### 2 東原遺跡と隣接遺跡群（第6図）

**東原遺跡と隣接遺跡群** 東原遺跡は、知井宮多聞院遺跡・多聞院北遺跡と隣接した集落遺跡であり、その分布状況（出雲市教育委員会 1989・1993）から、これらの遺跡は本来一体的な集落遺跡であったと可能性が高い。遺跡群全体では、東西約400m、南北約300mの規模を持



第6図 東原遺跡周辺の調査状況

つ集落となる。

知井宮多間院遺跡では、1948（昭和28）年に行われた杉原莊介氏による予備調査、1949（昭和24）年から5次にわたって行われた大社考古学会の発掘調査、1958（昭和33）年に行われた明治大学による発掘調査によって、弥生時代中期中葉以降の貝塚が確認されており、弥生土器・土師器・石器、貝輪・鹿角装刀子等も出土している（池田1960a・b、田中・西尾1988、東森1980）。その一部は「多間院貝塚」として1959（昭和34）年出雲市指定史跡にも指定されている。周囲の散布遺物には糸切りを有する須恵器・土師器も確認されており、弥生時代中期中葉から古代までは断続的に人々が生活していたものと思われる。

東原遺跡についても、過去の分布調査で須恵器等の散布が報告されており（出雲市教育委員会1989）、知井宮多間院遺跡と類似した集落遺跡の造営期間が想定できる。

ただし、東原遺跡北部にあたる今回の調査地点の出土品や多間院北遺跡散布遺物では、須恵器等は確認されておらず、その造営期間は遺跡群南部に比べて短いことが推定できる（本書・出雲市教育委員会1989）。集落の中心は、より造営期間が長い遺跡群南部にあった可能性が高いと言えよう。

未だ調査例が僅少な遺跡群であり、その様相についても不明な点が多いが、過去の知井宮多間院遺跡の調査や今回の調査からは、弥生時代中期後葉～古墳時代初頭を最盛期とする大規模な集落の存在が見えてきた。出雲平野の主要弥生集落の一つとして、将来的な調査の進展が期待される。

## 参考文献

- 池田満雄 1960a 「考古資料」『出雲市の文化財—出雲市文化財調査報告第二集一』 出雲市教育委員会 33～35頁  
 池田満雄 1960b 「貝塚・古墳」『出雲市の文化財—出雲市文化財調査報告第二集一』 出雲市教育委員会 75～83頁  
 高橋周 2011 「弥生時代の出雲平野における水域復元」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第1集 出雲弥生の森博物館 1～13頁  
 田中義昭・西尾克己 1988 「出雲平野における原始・古代集落の分布について」『山陰地域研究』第4号 島根大学山陰地域研究総合センター 13～45頁  
 東森市良 1980 「知井宮多間院遺跡」『出雲・上堀治地域を中心とする埋蔵文化財報告書』 島根県教育委員会 42～47頁  
 出雲市教育委員会 1989 『神門地区遺跡詳細分布調査報告書』  
 出雲市教育委員会 1993 『出雲市遺跡地図』

## 第2章 上塩治横穴墓群の調査

### 第1節 調査に至る経緯と経過

県道出雲三刀屋線は出雲市と雲南市を結ぶ主要地方道であり、同上塩治工区道路改良工事は、島根県出雲県土整備事務所により計画されたものである。事業地が周知の埋蔵文化財包蔵地「上塩治横穴墓群」の範囲内に及ぶことから、事業主体である島根県出雲県土整備事務所と協議を重ね、発掘調査を実施することが決定した。

その後、2012（平成24）年8月から2014（平成26）年5月まで上塩治横穴墓群第40支群の発掘調査を、2015（平成27）年9月から2016（平成28）年4月まで第3支群の発掘調査を実施し、それぞれ島根県教育委員会と遺跡の取扱協議を行い、遺跡の記録保存が決定していた。ここまで発掘調査に関しては、2016（平成28）年9月と2018（平成30）年3月に発掘調査報告書を既に刊行している。

今回の調査地のうち、第40支群35・36号横穴墓については、2014（平成26）年度までの発掘調査時に既にその存在を確認していたが、既存構造物により安全な発掘調査が困難であったため、島根県教育委員会との取扱協議で工事立会の指示を受けていたものである。その後、事業者から2018（平成30）年1月に当該範囲の構造物撤去に伴う掘削工事を実施するとの連絡を受け、同年1月9日～1月29日の期間で工事立会調査を実施した。

第3支群20号横穴墓については、2016（平成28）年度までの発掘調査時に本来の地形が残存しておらず、かつ安全な発掘調査の実施が困難と判断したエリアで新たに発見された横穴墓である。2019（平成31）年2月7日、県道出雲三刀屋線上塩治工区道路改良工事の施工業者から、工事中に横穴墓らしき地形を確認したとの連絡を受けた。同日、出雲市文化財課職員が現地を確認し、新発見の横穴墓の可能性が高いと判断した。県道用地外の私有地を含め、更に掘削が行われる予定とのことであったため、事業主体である島根県出雲県土整備事務所と協議の上、同年2月13日～28日の期間で発掘調査を実施した。発掘調査終了後、島根県教育委員会と協議を行った結果、遺跡の記録保存が決定した。なお、第3支群20号横穴墓下方の斜面については同年3月までの期間で工事立会も実施したが、旧地形は残存しておらず、新たな横穴墓も発見できなかった。

#### 上塩治横穴墓群第3・40支群の調査に関する主な文化財保護法上の文書

2012（平成24）年 ※第3・40支群

7月19日 「埋蔵文化財発掘の通知について」事業者から市教委経由県教委へ

7月24日 「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委から県教委へ

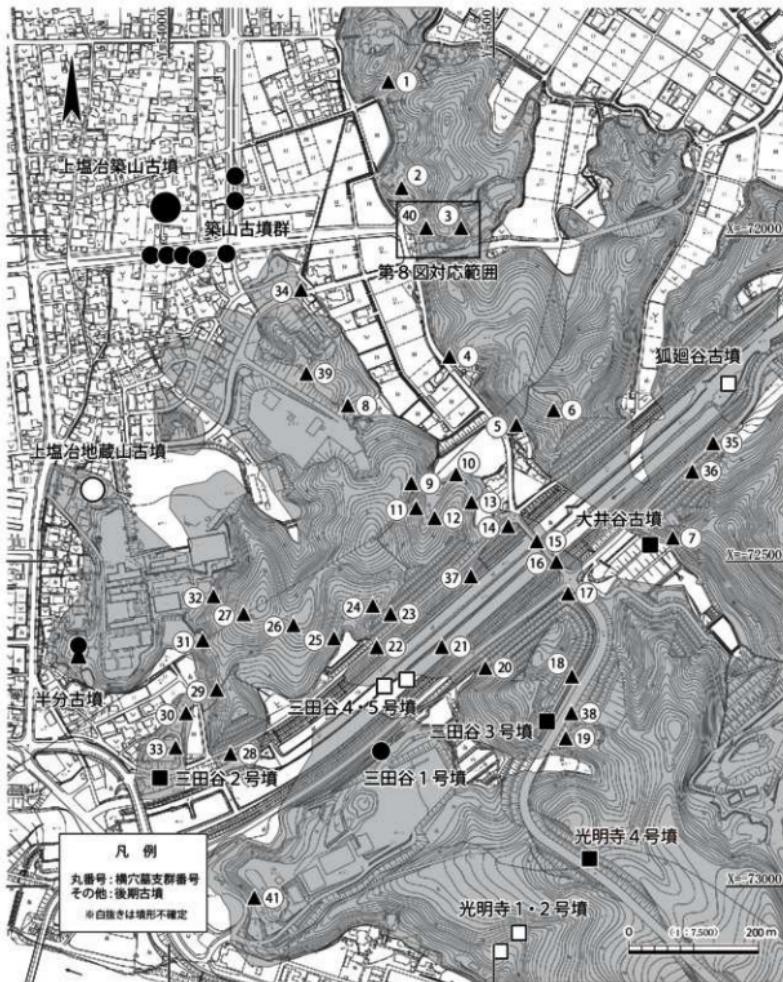
7月30日 「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」県教委から市教委経由で事業者へ

2013（平成25）年 ※第40支群

- 1月 25 日 「主要地方道出雲三刀屋線上塙治工区社会资本整備事業総合交付金（改良）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委へ
- 1月 25 日 「遺跡の取り扱いについて（通知）」県教委から市教委へ
- 5月 16 日 「発掘調査の通知について」市教委から県教委へ
- 2014（平成26）年 ※第40支群
- 4月 1 日 「発掘調査の通知について」市教委から県教委へ
- 5月 30 日 「主要地方道出雲三刀屋線上塙治工区社会资本整備事業総合交付金（改良）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（I区-2、II区ほか）に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委へ
- 5月 30 日 「埋蔵物発見届」市教委から出雲警察署へ
- 5月 30 日 「埋蔵文化財保管証」市教委から県教委へ
- 6月 3 日 「遺跡の取り扱いについて（回答）」県教委から市教委へ
- 9月 26 日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」県教委から市教委へ
- 2015年（平成27）年 ※第3支群
- 9月 1 日 「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委から県教委へ
- 2016年（平成28）年 ※第3支群
- 4月 22 日 「主要地方道出雲三刀屋線上塙治工区社会资本整備事業総合交付金（改良）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（III区）に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委へ
- 4月 22 日 「遺跡の取り扱いについて（回答）」県教委から市教委へ
- 4月 22 日 「埋蔵物発見届」市教委から出雲警察署へ
- 4月 22 日 「埋蔵文化財保管証」市教委から県教委へ
- 7月 13 日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」県教委から市教委へ
- 2018（平成30）年 ※第40支群 35・36号横穴墓
- 1月 31 日 「埋蔵物発見届」市教委から出雲警察署へ
- 1月 31 日 「埋蔵文化財保管証」市教委から県教委へ
- 2月 7 日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」県教委から市教委へ
- 2019（平成31）年 ※第3支群 20号横穴墓
- 2月 7 日 「遺跡発見の通知について」事業者から市教委経由県教委へ
- 2月 8 日 「遺跡の発見について（通知）」県教委から市教委経由事業者へ
- 2月 12 日 「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委から県教委へ
- 3月 15 日 「埋蔵物発見届」市教委から出雲警察署へ
- 3月 15 日 「埋蔵文化財保管証」市教委から県教委へ
- 3月 22 日 「県道出雲三刀屋線上塙治工区道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委へ
- 3月 22 日 「遺跡の取り扱いについて（回答）」県教委から市教委へ
- 5月 10 日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」県教委から市教委へ

## 第2節 遺跡の位置と環境

上塩治横穴墓群は出雲市上塩治町地内に所在する。神戸川が中国山地から出雲平野へ流れ込む出口付近右岸にあたる丘陵地にあり、東西約1km、南北約1.5kmの範囲に、41支群236穴の横穴墓が確認されている（例言位置図・第7図）。山陰を代表する大規模な横穴墓群である。



第7図 上塩治横穴墓群と周辺の後期古墳分布図

上塩治横穴墓群の立地する丘陵及びその隣接地には、古墳時代後期後半以降、上塩治築山古墳・上塩治地蔵山古墳といった地域を代表する首長墳のほか、築山古墳群・三田谷古墳群などの中小古墳も数多く築造されている（第7図）。同時期の首長墳・中小古墳・横穴墓が近接して築造された墓域としても注目される。

今回調査を実施した第3支群と第40支群は、上塩治横穴墓群の北東部に位置する丘陵地の尾根を挟んだ両斜面に隣接して築造されている。横穴墓が築造された基盤層は、いずれも「布志名層」と呼ばれる海成堆積の細粒砂岩・シルト岩を主体とした地層（鹿野・竹内1991）である。

今回の調査を含め、第3支群で20基、第40支群で36基、計56基もの横穴墓が確認されており（第8・9図）、上塩治横穴墓群の中でも最大の横穴墓密集地である。

## 第3節 第40支群35・36号横穴墓の調査

### 1 調査の概要（第8・9図）

第40支群35・36号横穴墓については、2014（平成26）年度の発掘調査時、調査継続に危険を伴うと判断したため、同年5月に一旦埋め戻しを行っている。本報告に使用した写真・図面の一部は2014（平成26）年度に記録したものである。その後、2018（平成30）年1月に行われた既存構造物撤去工事の立会の際、掘削可能範囲について重機による横穴墓周辺の遺構再検出を行い、検出後は手掘りによって遺構・遺物の確認を行った。

いずれの横穴墓も2014（平成26）年度以前の発掘調査で確認した第40支群の横穴墓の内、1～18号横穴墓と同一の小支群を形成する。

### 2 第40支群35号横穴墓（第10図、図版4・5）

**築造位置（第8・9図）** 第40支群西端部の南向き斜面に開口する横穴墓で、玄門部の標高は11.7mである。西に隣接する道路高が標高13.2mであり、地下に埋没した状態であった。

**墓道・閉塞部（第10図）** E-87°-S方向に開口し、床面幅約70cmを測る。調査可能範囲外へと続くため残存長は不明だが、45cm以上残存していることが確認できる。主軸方向中央の床面に幅10cm前後、深さ8cm前後の排水溝が玄室から続く。玄門との境界部には高低差5cm前後の段を設け、玄門側を高くする。

**玄門（第10図）** 床面幅約60cm、長さ約60cmを測る。天井部は残存していないが、残存部の形状から高さ60～70cm程度のアーチ形の断面形だったと考えられる。主軸方向中央の床面に墓道へと続く排水溝がある。玄室との境界部には高低差4cm前後の段を設け、玄室側を高くする。

**玄室（第10図）** 床面は幅60～115cm、長さ約230cmを測る、徳利形の平面形である。明確な袖部は無い。墓道から玄室までの残存長は335cm以上となる。天井部は崩壊していたが、残存部の状況から高さ80cm前後のアーチ形天井であったと考えられる。壁沿いと主軸方向中央の床面に浅い排水溝が掘り込まれ、中央の排水溝は玄門・墓道へと続く。玄室内奥壁付近の床面直に25cm大の扁平



第8図 遺構配置平面図



30m a

第40支群

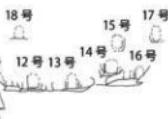
25m

20m

15m

10m

a'



30m b

22号

23号



24号

25号



26号



27号



b'



32号



34号

25m

20m

15m

10m

30m c

第3支群

11号

15号



14号



13号



12号



25m

20号

18号

17号

16号

15号

14号

13号

12号

11号

10号

9号

8号

7号

6号

5号

4号

3号

2号

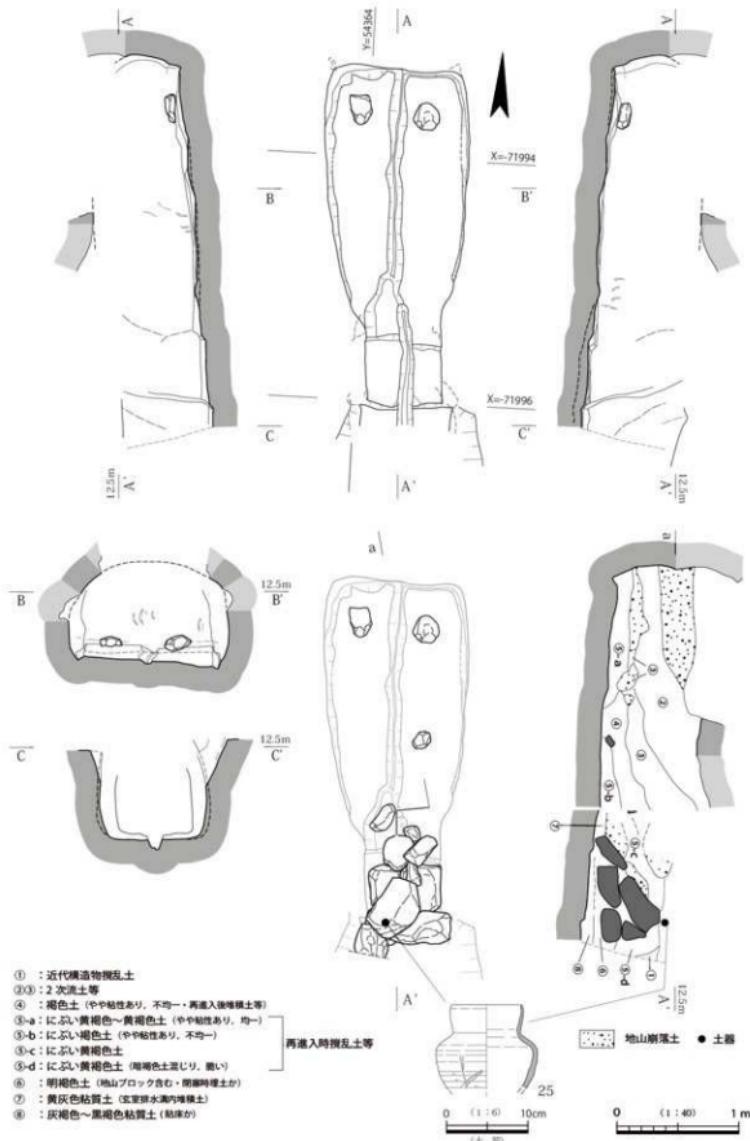
1号

36号

35号



第9図 遺構配置立面図



第10図 第40支群35号横穴墓遺構実測図

な割石が2点並んで出土した。棺台の一部や石枕等として用いられた石材であろうか。閉塞石転石である可能性も否定できない。また、奥壁と側壁に加工一部痕が残存しており、丸刃削痕が観察できる。

**閉塞石（第10図）** 閉塞部・玄門部を中心に20～50cm大の割石・自然石が積み上げられていた。一部は最終閉塞後の移動を受けており、⑧層上面を基盤として、少なくとも55cm程度の高さまで密に石材を積み上げた閉塞であることが観察できる。

**土層堆積状況（第10図）** ④層以上は再進入後の堆積土・崩落土等、⑤層は再進入時の搅乱土等、⑥層は初葬時の閉塞に伴う埋土等と思われる。⑦層は排水溝内堆積土である。⑧層はその上面が玄室床面高につながると共に、閉塞石積み上げの基盤層となる土層である。初葬時からの貼床であろうか。

初葬後少なくとも1回の再進入の痕跡が認められるとともに、玄室内遺物が皆無であった。盜掘を受けているものと考えられる。

**遺物出土状況（第10図）** 閉塞部上の閉塞石直上付近から須恵器直口壺の破片（25）が出土した。出土地点は最終進入時搅乱層内にあたると思われ、本来は玄室内へ配置された副葬品であった可能性が高い。

**出土遺物（第13図・図版6）** 25は閉塞部上から出土した須恵器直口壺である。体部外面にヘラ記号が確認できる。破片のためヘラ記号の全体像は不明だが、残存部からは二重線による「×」のように見える。

**時期** 類似した須恵器直口壺が第40支群29号横穴墓から出雲4期の須恵器群とともに出土している。35号横穴墓の時期も同様であろう。

### 3 第40支群36号横穴墓（第11図、図版4・5）

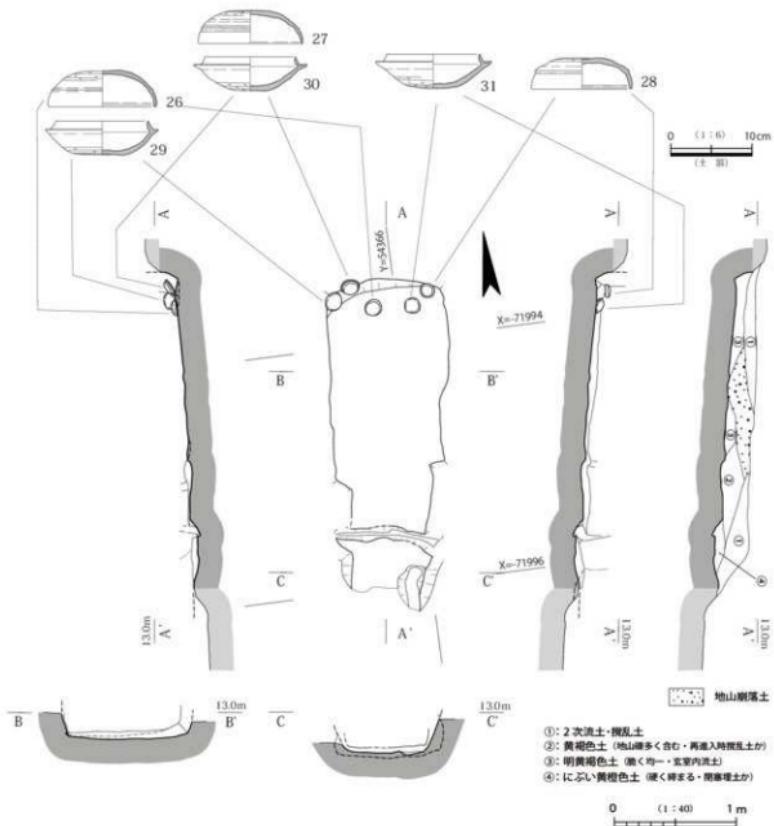
**築造位置（第8・9図）** 第40支群35号横穴墓の東、同1号横穴墓の西南西に隣接して存在する。玄門部の標高は12.7mである。35号横穴墓より1m高く、1号横穴墓よりも0.8m低い。35号横穴墓と同様に地下に埋没した状態であった。

**墓道・閉塞部（第11図）** S-7°-W方向に開口し、床面幅約60～85cm、残存長約50cmを測る。閉塞部には墓道床面から4cm前後、玄門床面から8cm前後の深さの溝が掘り込まれる。また、右側壁沿い床面に浅い溝条の痕跡が観察できるが、意図的な加工かは不明である。閉塞石は無かった。

**玄門（第11図）** 床面幅約65cm、長さは左側壁で約30cm、右側壁で約50cm、残存高約20cmを測る。天井部は残存していない。

**玄室（第11図）** 床面は、幅95cm、長さは左側壁で約175cm、右側壁で約155cmを測る、長方形の平面形である。墓道から玄室までの残存長は255cmとなる。天井は残存しておらず、残存高約15cmを測る。奥壁沿い床面に断面形V字状、深さ3cm前後の掘り込みが確認できる。

**土層堆積状況（第11図）** ①層は2次流土・搅乱土、②層は再進入時の搅乱土等であろう。③層は玄室内流土、④層は初葬時の閉塞埋土と思われる。玄室内遺物は全て③層内のほぼ床面上から出土しているが、その配置はやや乱れており、全てが初葬時の状態を保っているとは考えにくい。玄室内にほとんど流土が流入していない段階で追葬が行われた可能性がある。②層で想定した再進入時



第11図 第40支群36号横穴墓実測図

の痕跡は盜掘等を試みたものであろうか。

**遺物出土状況(第11図)** 玄室内奥壁寄りの床面直上付近から須恵器杯蓋3点(26～28)、杯身3点(29～31)が出土した。全て口縁を下に向けて配置されていた。杯蓋27と杯身30は身を下に、蓋を上に重ねて奥壁左端に立てかけるように配置されており、杯身29も27・30と並んで同様に立てかけられていた。奥壁寄り中央部出土の杯蓋26が、本来は杯身29の上に重なるものであったと思われ、4点一組の上器枕であった可能性が高い。また、杯蓋26付近で杯身31が並んで出土しているが、これらも追葬時に組み合わせて土器枕としたものである可能性がある。玄室右奥隅から出土した杯蓋28については、床面から若干浮いた状態で出土している。最終進入時に若干の移動を受けたものであろうか。また、杯蓋28は杯身26と組み合わないことが確実である。

**出土遺物（第13図、図版6）** 26～31は玄室内から出土した須恵器蓋杯で、26～28が杯蓋、29～31が杯身である。杯蓋26の天井部外面にはやや粗雑なヘラケズリが、杯蓋27には粗雑なヘラケズリが施される。杯蓋28は外面が風化しているが、天井部周辺ヘラケズリのようである。いずれの杯蓋も肩部外面に明確な稜を持ち、26・28では口縁内面に沈線が廻る。

**時期** 玄室内出土の須恵器蓋杯は、いずれも出雲4期の特徴を示す。よって、横穴墓の築造、埋葬も全て出雲4期の中で終了しているものと考えられる。

## 第4節 第3支群 20号横穴墓の調査

### 1 調査の概要（第8・9図）

工事中発見となった第3支群20号横穴墓については、手掘りによる遺構・遺物の確認を行って調査を進めた。同一斜面下方を中心周辺の工事範囲については重機によって遺構・遺物の有無を確認したが、新たな横穴墓や遺物は全く発見できなかった。

調査地同一斜面下方の麓部付近は、かつて「アオゴシ横穴群」と呼ばれていた約10基の横穴墓（第3支群1～10号横穴墓）が開口していた地点（池田1956・門脇1980）と推定される。1980年頃までは破損著しい2基の横穴墓が残存していたとされるが、その痕跡もすでに消失していたようである。

### 2 第3支群 20号横穴墓（第12図、図版4・5）

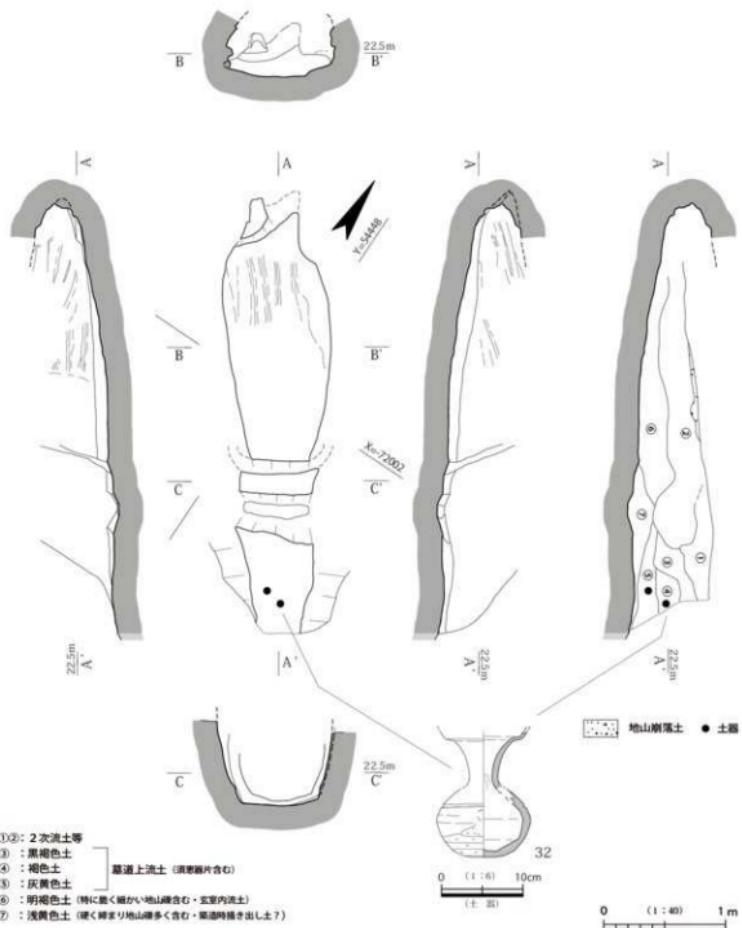
**築造位置（第8・9）** 第3支群南部の南東方向斜面中腹に開口する横穴墓で、玄門部の標高は22.2mである。基本的に周囲の旧地形はほとんど残存していない。

**墓道・閉塞部（第12図）** E-57°-S方向に開口し、床面幅35～65cm、残存長140cmを測る。閉塞部から約20cm前方に幅35cm前後、深さ5cm前後の溝が主軸方向に直行して掘り込まれている。閉塞石は無かった。

**玄門・玄室（第12図）** 玄門～玄室の床面は、入口幅48cm、最大幅85cm、奥壁付近幅約50cm、奥行き205cmを測り、不整形な縱長の平面形である。墓道から玄室までの床面残存長は345cmとなる。天井部は残存していないが、現状で高さ60cm以上のアーチ状断面形となる。閉塞部から約70cm以上奥には加工痕が顕著に残っており、側壁で粗い平刃削痕が、床面で溝状痕が観察できる。特に現状の奥壁付近は加工が粗く、いびつな形状となる。玄門・玄室の区別も明瞭ではなく、造墓途中の横穴墓と考えられる。被葬者を埋葬するには十分なスペースを有しているが、実際に埋葬された痕跡は確認できなかった。

**土層堆積状況（第12図）** ②層以上は2次的な流土・攪乱土・崩落土等、③～⑤層は墓道上の一次流土、⑥層は玄室内の一次流土と思われる。⑦層は築造時の挿き出し土等であろうか。

**遺物出土状況（第12図）** 墓道上流土③⑤層より須恵器瓶片（33ほか）が、④層より須恵器瓶片（32）が出土している。須恵器瓶について、同一個体と考えられる頭部片1片と体部片1片が重なって出土したが、その他の破片は発見できなかった。③～⑤層はいずれも非常に脆い土質で自然流土と

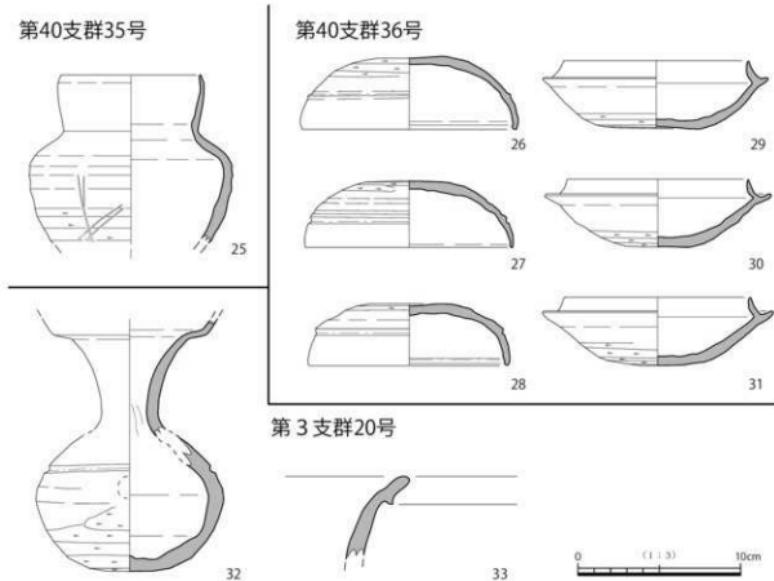


第12図 第3支群 20号横穴墓遺構実測図

思われ、須恵器も流入遺物である可能性がある。

**出土遺物 (第13図、図版6)** 32・33は墓道上出土須恵器である。32は肩部に1条の沈線を持つ無文型の縫で、頸部が大きく開き、肩に丸みを帯びたタイプである。無文型の縫は石見地方東部に偏って出土することが指摘されている (岩本2019)。33は甕口縫部である。

**時期** 32の須恵器縫については、石東Ⅲ期～Ⅳ期初頭ごろ、(出雲4期新相～5期ごろに併行か) の



第13図 遺物実測図

資料と考えられるが、20号横穴墓に伴う遺物かは不明であり、横穴墓の正確な時期も不明である。ただし、ほぼ完成形と思われる墓道の床面幅は非常に狭く、出雲4期以前の横穴墓に多く見られる特徴を示している。

## 第5節 結語

### 1 調査のまとめ

第40支群においては、35・36号横穴墓の2基を調査し、いずれも須恵器編年出雲4期の横穴墓であることが確認できた。これまでの発掘調査においても、当支群の最盛期が出雲4期にあることを指摘してきたが、その様相がさらに顕著となったといえよう。また、35号横穴墓については、閉塞石や玄室形態も比較的良好な状態で残存していた。

第3支群においては、新発見となる20号横穴墓を調査し、造墓途中の横穴墓であることが確認できた。埋葬に使用された痕跡が確認できなかったため、正確な時期判定は困難であるが、出雲4期以前まで遡る可能性がある。

以上、3基の調査をもって、上塩治横穴墓群第3・40支群の調査は全て終了することとなった。第3・40支群は、遺跡内最大の横穴墓密集地であるとともに、遺跡内最古段階の横穴墓が確認され

る重要な支群である。両支群で発見された全ての横穴墓の様相を明らかにできたことの意義は大きい。

## 2 第3・40支群の横穴墓について

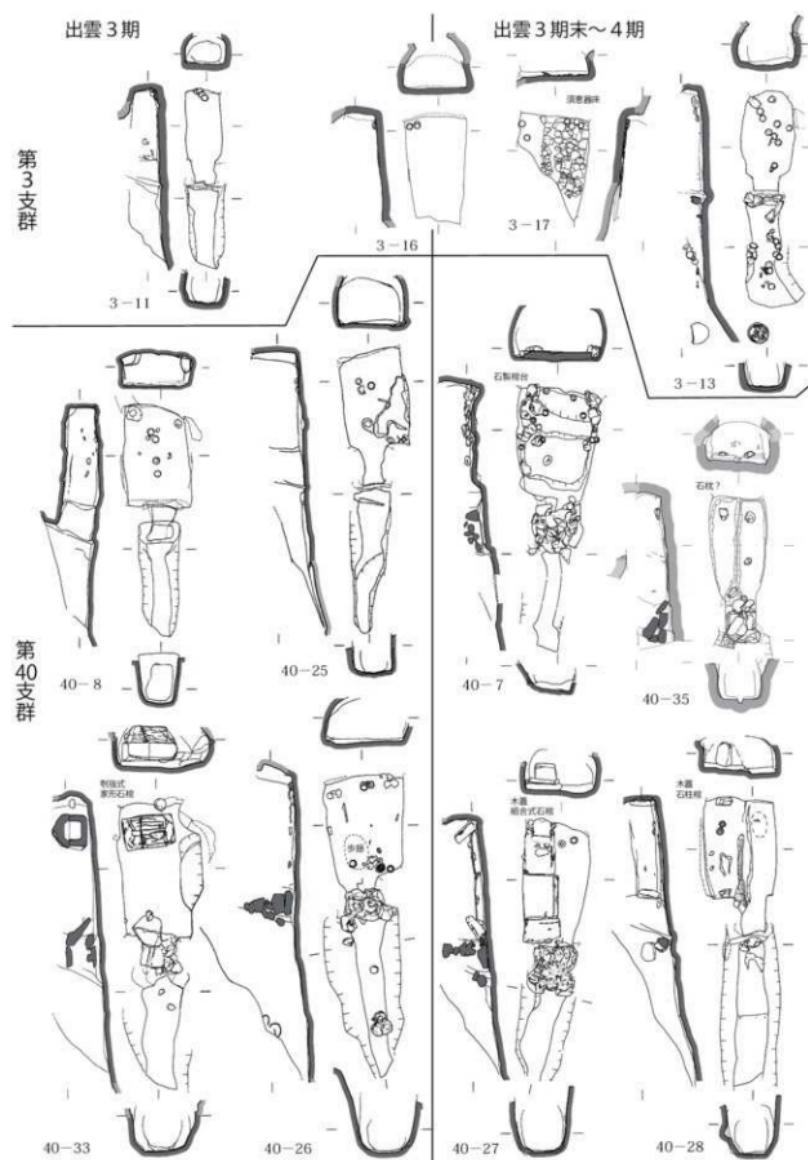
上塩治横穴墓群は東西約1km、南北約1.5kmの範囲に41支群236基以上の横穴墓が築かれた山陰を代表する横穴墓群である。上塩治築山古墳など周辺の首長墳・中小古墳の構造状況とも連動して築造されており、地域政権と密接なつながりのある人々が葬られた墓域と考えられる（出雲市教育委員会2018）。

その中でも、第3・40支群は遺跡内最大の横穴墓密集地で、遺跡全体の4分の1近くの横穴墓が、出雲3～4期（TK43～TK209段階ごろ）に限ると8割もの横穴墓が密集している。また、出雲3期は上塩治横穴墓群最古段階で、現在のところ第3・40支群内でしか横穴墓が確認されていない。第3・40支群は、遺跡の前半期において上塩治横穴墓群の中核を成したと考えられる墓域である。

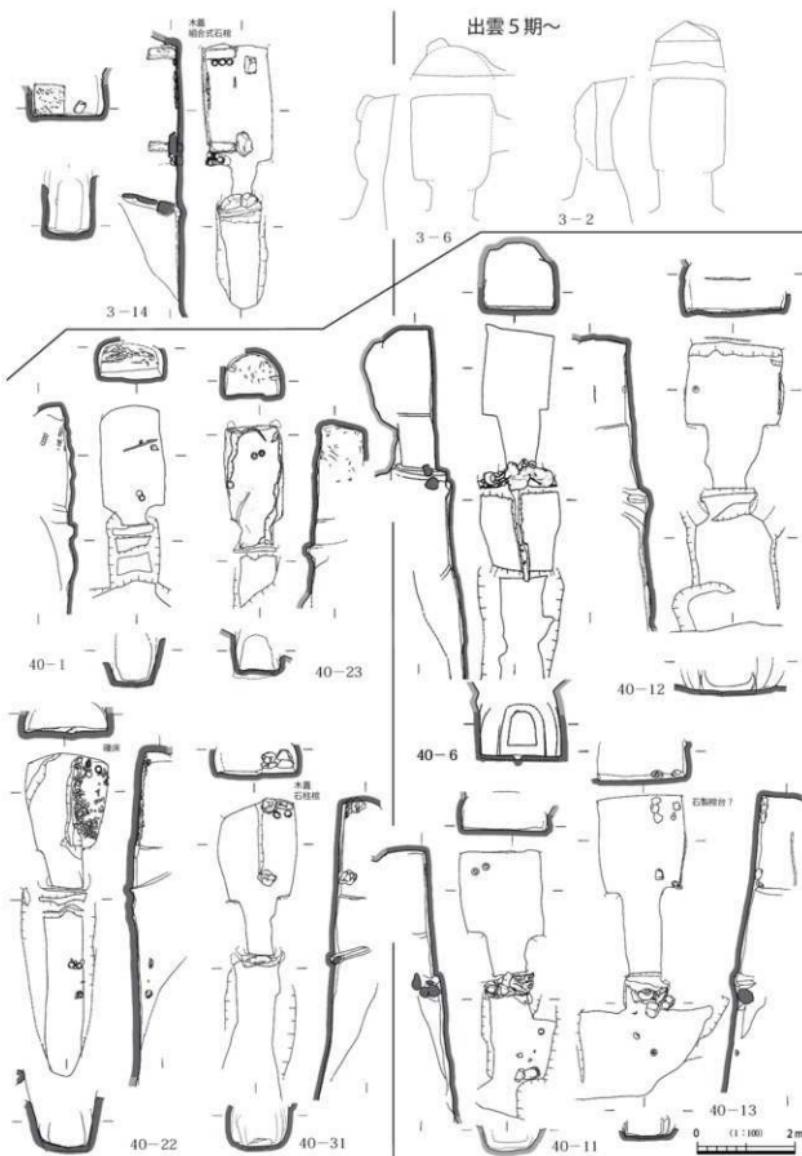
県道出雲三刀屋線上塩治工区道路改良工事に伴い、これまで第40支群36基（1～36号横穴墓）、第3支群10基（11～20号横穴墓）の横穴墓を発見し、その調査を実施してきた（出雲市教育委員会2016a、2018、本書）。すでに消失していた第3支群1～10号横穴墓（池田1956、門脇1980）については詳細不明な点も多いが、今回の調査をもって、両支群内で発見された全横穴墓の調査を終了したこととなる。過去の調査成果を含め、上塩治横穴墓群第3・40支群の横穴墓の特徴を改めて整理し



第14図 第3・40支群横穴墓配置図



第15図 第3・40支群における横穴墓の時期と形態



ておきたい。

第14・15図、第1表は第3・40支群の横穴墓について、その配置、時期、主な特徴を整理したものである。各支群はその立地によって、第3支群をA～Dの、第40支群をA～Cの小支群に細分している。各図表の内、第3支群1～10号横穴墓については門脇俊彦氏の報告（門脇1980）、図面（山陰横穴墓研究会1997）を参考としている。

**横穴墓の形態（第15図、第1表）** 横穴墓の形態については、過去の報告でも指摘してきたように（出雲市教育委員会2016a）、玄室で「アーチ形天井縱長方形プラン（出雲3～5期）→家形天井方形プラン（出雲5期）」、埋葬施設で「僅少（出雲3期）→不定型かつ多様（出雲4期）→僅少（出雲5期）」、閉塞石の位置で「玄門部（出雲3・4期）→閉塞部（出雲4・5期）」、玄門で「短（出雲3・4期）→中（出

第1表 第3・40支群横穴墓主要要素一覧表

支群	小群	横穴墓番号	逝去節編年				横穴形態		埋葬施設	玄門	閉塞石	主な副葬品					備考		
			3期	4期	5期	6期	先	後				大刀	馬具	鏡	工具	玉環			
3	A	11号					アーチ	縱長	×	中									
		12号					アーチ	台形	×	中									
		13号					アーチ	縱長	短	閉塞部切石	○	○	○	直進	直進				
		14号					アーチ?	縱長	木蓋結合式石棺	中	閉塞部切石板	●							
		15号					アーチ	縱長	短				○	○	○	○	直進		
		16号					アーチ	縱長	?	?	?								
		17号					アーチ?	縱長	?	遺産類	?	?							
		18号					?	?	?	?	剝石?								
C	B	19号	?				逝去節の中				表?								
		2号	?				宝庫	束縛	?									少林の多い宝庫例	
		6号	?				正方形	?											
		20号	?	?			逝去節の中				中?								
40	A	35号					アーチ	縱長	×	花紋等?	中	玄門部切石							
		36号					?	縱長	?	短									
		1号					アーチ	縱長	?	短	●	○	○	○	○				
		2号					アーチ	縱長	?	短									
		3号	?	?			逝去節の中				中?								
		4号					アーチ	縱長	?	?								石見地方の深差部	
		5号					宝庫	正方形	?	長			●						
		6号					アーチ	縱長	○	長	閉塞部切石	△							
		7号					アーチ	縱長	×	石製棺台	中	玄門部切石	○						
		8号					平	縱長	?	中									
A	B	9号					?	縱長	?	短	閉塞部板石								
		10号					?	正方形	?	長	閉塞部板石	○	●						
		11号					アーチ	正方形	○	中	閉塞部切石								
		12号					?	正方形	○	中	閉塞部切石	●							
		13号					?	正方形	○	石製棺台?	?	閉塞部切石						不明鉄器	
		14号	?	?			アーチ	縱長	?	?	?								
		15号					?	正方形	?	中	閉塞部切石								
		16号					?	正方形	○	長	閉塞部切石								
		17号	?	?			アーチ	正方形	?	中								石見地方の深差部	
		18号					?	縱長	?	短									
B	C	19号	?	?			?	?	?	短	剝石?								
		20号					アーチ	縱長	?	鍵扉・遺産類	中	玄門部切石							
		21号		?			アーチ	縱長	?	鍵扉	中								
		22号					アーチ	縱長	?	鍵扉	中								
		23号					アーチ	縱長	?	短			○	△					
		24号					アーチ	縱長	?	短			○	○					
		25号					アーチ	縱長	?	中			○	○				石見地方の深差部	
		26号					アーチ	縱長	?	玄門部切石	○	?	?	○	○				
		27号					アーチ	?	木蓋結合式石棺	中	玄門部切石	?	?	○	○	●	少林・鑿痕跡分布		
		28号					アーチ	?	木蓋石棺	中	閉塞部切石	○	○	○	○	○	鑿跡		
40	C	29号					アーチ	?	木蓋石棺	短	閉塞部切石							金環片	
		30号					アーチ	?	鍵扉	中	玄門部切石								
		31号					アーチ	?	木蓋石棺/陶瓶	中	閉塞部切石								
		32号					アーチ?	正方形	?	中									
		33号					アーチ	?	新後圓形石棺	中	玄門部切石	○						靈磁跡散布	
		34号					アーチ	?	石製棺台	中	閉塞部切石								

※玄門: 短: 0.5m未満、中: 0.5m～1.2m未満、長: 1.2m以上

※大刀 ●: 对80cm以上以上 ○: 对80cm以下

※耳環 ●: 金環 ○: 銀環 △: 不明

雲3～5期)→長(出雲5期)」、漢道で「無(出雲3～5期)→有(出雲5期)」の相対的な変化の流れが追えるようである。上塩治横穴墓群前半期における横穴墓の基本的な変遷傾向を示しているものと思われる。

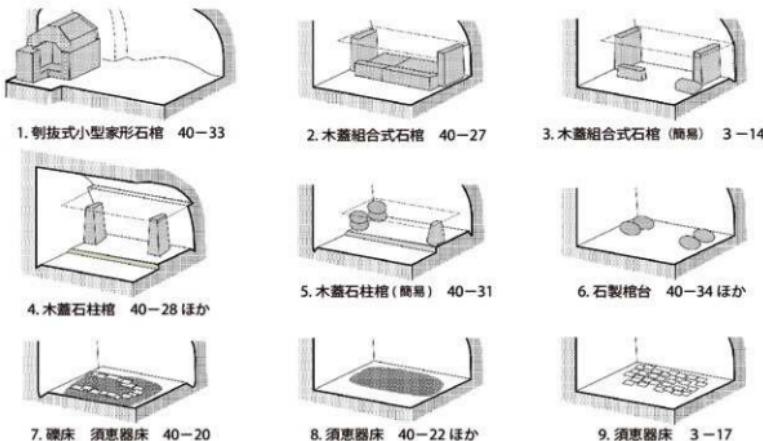
なお、出雲3期に築造された第40支群8号横穴墓には、極端に天井高の低い平天井形態や玄室に向かって低くなる床面構造など、周辺地域に例を見ない形態的特徴が見られる。出雲地方西部における横穴墓の最古形態となる可能性もあり、特に注目すべき横穴墓である。

**埋葬施設の形態(第16図)** 埋葬施設については多様かつ不定形な形態が確認できる(出雲市教育委員会2016a・2018)。屍床・土器枕等を除く特徴的な埋葬施設の形態について第16図に模式図を示した。これらの埋葬施設は、ほぼ全て出雲4期以前に築造された横穴墓から確認したものである。

上塩治横穴墓群の他支群において、出雲5期以降主流となる定型的な組合式家形石棺や有縁石床などとは異なった埋葬施設の形態が採用されていることが注目される。特に、横口の無い削抜式小型家形石棺(第16図1)、木製の蓋を用いたと考えられる石製埋葬施設(第16図2～5)、柱状の石材を用いた埋葬施設(第16図4・5)は特徴的である。

**支群の特徴** 上塩治横穴墓群第3・40支群は、前述のとおり上塩治横穴墓群内最大の横穴墓密集地であるとともに、特に遺跡の前半期(出雲3・4期)においてその中核を成したと考えられる墓域である。出雲5期になっても横穴墓の築造は継続するものの、その特異性は出雲3・4期に認められる。

出雲3期は上塩治横穴墓群において横穴墓の造営が開始された時期である。当該期においては上塩治横穴墓群の他支群では築造例が確認されておらず、第3・40支群においてのみその存在が確認される。埋葬施設において特筆すべき横穴墓として削抜式小型家形石棺が発見された第40支群33号横穴墓が、副葬品において特筆すべき横穴墓として金銅製歩搖(馬具飾り)が発見された同支群26



第16図 第3・40支群の埋葬施設模式図

号横穴墓が挙げられる。地域政権との密なつながりを持った集団の墓域として、その築造が開始されたと考えられる。

出雲4期は上塙治横穴墓群において第3・40支群外へもその築造が拡散する時期である。その築造数においては未だ第3・40支群が他を圧倒し、多様な埋葬施設も數多く確認される。ただし、家形石棺や装飾大刀、装飾馬具は1点も確認されていない。一方、他支群においては一部で組合式家形石棺（第33支群6号横穴墓）や異形家形石棺（第33支群7号横穴墓）、銀装大刀（第8支群3号・第33支群7号横穴墓）も確認されており、第3・40支群より上位の埋葬施設や副葬品が確認されている。出雲4期の間には支群としての優位性が徐々に失われていったようである。

出雲5・6期は上塙治横穴墓群全域で数多くの横穴墓が築造される時期である。第3・40支群においても横穴墓の築造は継続されるが、その多くは出雲5期の間に築造を終えたと考えられる。

以上、上塙治横穴墓群第3・40支群について、これまでの調査成果を改めて整理してきた。近年の出雲平野周辺地域においては、当該遺跡のみならず杉沢横穴墓群（出雲市教育委員会2016b）、の子谷横穴墓群（島根県教育委員会2017）、神門横穴墓群第10支群（出雲市2019）等、数多くの横穴墓群の発掘調査が行われてきている。これらの新たな調査成果を総合的に評価していくことで、出雲地域の横穴墓の様相はより明確となることだろう。今後の研究の進展に期待したい。

## 参考文献

- 池田満雄 1956 「上塙治地区的横穴墓」『出雲市の文化財 出雲市文化財調査報告』第1集 出雲市教育委員会 70～73頁
- 岩本真美 2019 「石見地域における須恵器の編年と地域性—「石見型須恵器」再考—」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集第22集 島根県古代文化センター
- 門脇俊彦 1980 「上塙治横穴墓群」『上塙治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』 島根県教育委員会ほか 89～122頁
- 鹿野和彦・竹内圭史 1991 「IV. 新第三紀」『今市地域の地質』地域地質研究報告5万分の1地質図幅 岡山(12) 第16号 地質調査所 79頁
- 出雲市 2019 『神門横穴墓群 10支群発掘調査現地説明会資料』
- 出雲市教育委員会 2016a 『上塙治横穴墓群第40支群』県道出雲三刀屋線上塙治工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1 出雲市の文化財報告32
- 出雲市教育委員会 2016 b 『杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群』出雲斐川中央工業団地造成工事に伴う工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市の文化財報告31
- 出雲市教育委員会 2018 『上塙治横穴墓群第3支群』県道出雲三刀屋線上塙治工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2 出雲市の文化財報告36
- 山陰横穴墓研究会 1997 『出雲の横穴墓—その型式・変遷・地域性—』第7回山陰横穴墓調査検討会
- 島根県教育委員会 2017 『のの子谷横穴墓群 京田遺跡3区』一般国道9号（出雲瀬戸道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3

# 写真図版





東原遺跡 完掘状況（西から）



東原遺跡 SD 1 (北北東から)



1



5



6



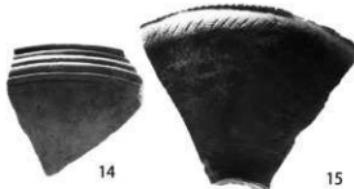
2



13



16

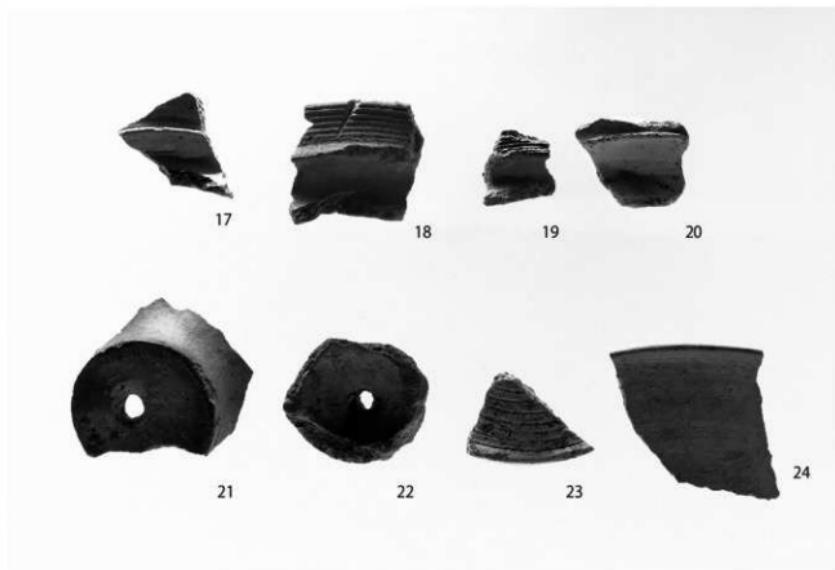


14

15

東原遺跡 出土土器 1

SD 1



東原遺跡 出土土器 2

3・4・7～12：SD 1, 17：SK 1, 18～24：遺構外

図版 4 上塩冶横穴墓群



上塩冶横穴墓群第40支群35・36号横穴墓 完掘状況（南から）



上塩冶横穴墓群第3支群20号横穴墓 完掘状況（南東から）



上塙治横穴墓群第 40 支群 35 号横穴墓  
玄室内配石状況（上が奥壁）



上塙治横穴墓群第 40 支群 36 号横穴墓  
遺物出土状況

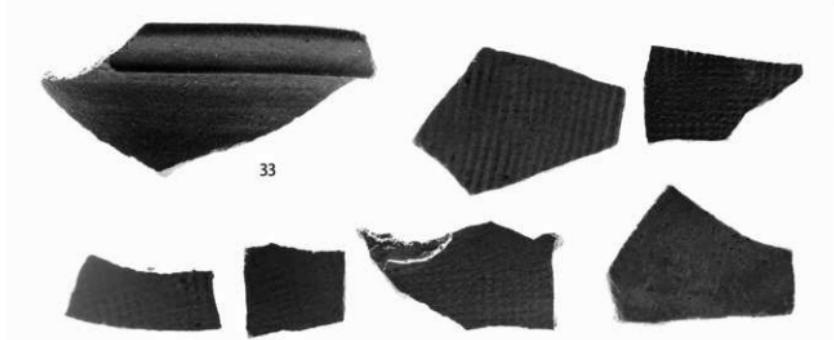
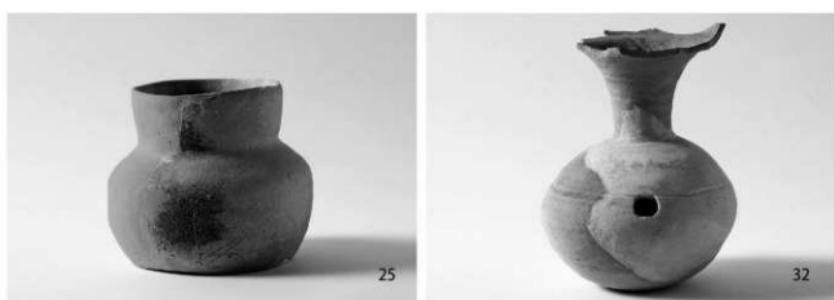
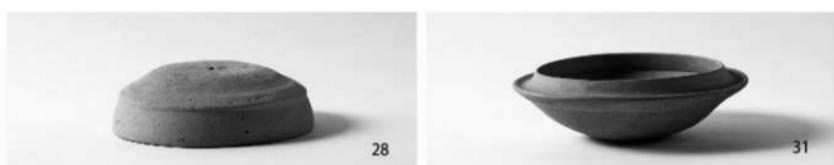
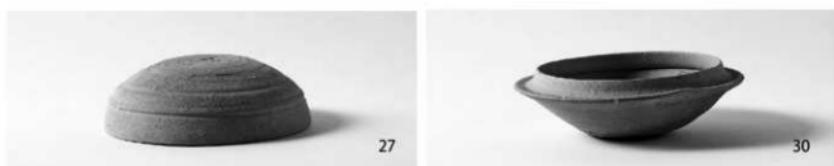
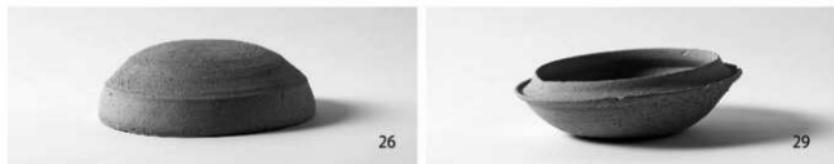


上塙治横穴墓群第 40 支群 35 号横穴墓  
閉塞状況（上が玄室）



上塙治横穴墓群第 3 支群 20 号横穴墓  
玄門・玄室

図版6 上塙治横穴墓群



上塙治横穴墓群 出土土器

25：第40支群35号横穴墓、26～31：第40支群36号横穴墓、33・その他：第3支群20号横穴墓

# 報告書抄録

ふりがな	れいわがんねんといずもしぶんかざいちょうさほうこくしょ					
書名	令和元年度出雲市文化財調査報告書					
副書名	東原遺跡 上塩治横穴墓群（第3支群・第40支群）					
シリーズ名	出雲市の文化財報告					
シリーズ番号	44					
編著者名	須賀照隆					
編集機関	出雲市 市民文化部文化財課					
所在地	〒 693-0011 島根県出雲市大津町 2760 TEL (0853) 21-6618					
発行年月日	2020年3月					
ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積
所収遺跡遺名	所在地	市町村	遺跡番号			発掘要因
東原遺跡	島根県出雲市 知井宮町 404 番 1 ほか	32203	W 163 (山根遺跡番号)	35° 20' 30"	132° 43' 33"	20161121 ~ 20161128
上塩治横穴墓群 第3支群	島根県出雲市 上塩治町 2985 番 2 ほか	32203	W 138-3 (山根遺跡番号)	35° 20' 58"	132° 45' 56"	20190213 ~ 20190228
上塩治横穴墓群 第40支群	島根県出雲市 上塩治町 2985 番 1	32203	W 138-40 (山根遺跡番号)	35° 20' 58"	132° 45' 53"	20180119 ~ 20180129
遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項
東原遺跡	集落遺跡	弥生時代		溝 1 基 土坑 1 基 ビット	弥生土器 葉～古墳時代初頭頃の集落跡	弥生時代中期後葉～古墳時代初期頃の集落跡
上塩治横穴墓群 第3支群	横穴墓	古墳時代		横穴墓 1 基 (造墓途中の横穴墓)	須恵器	20 号横穴墓 (新発見)
上塩治横穴墓群 第40支群	横穴墓	古墳時代		横穴墓 2 基	須恵器	35・36 号横穴墓
要約	<p>東原遺跡は、弥生時代から続く集落遺跡であり、弥生時代の貝塚で注目される知井宮多聞院遺跡などとも隣接した重要な弥生集落域である。</p> <p>今回の調査では、弥生時代中期後葉の溝 1 基、時期不明の土坑 1 基とビット 4 基、弥生時代中期後葉～古墳時代初期頃の土器を確認した。表探資料以外不明であった東原遺跡における初の発掘調査であり、貴重なデータを得ることができた。</p> <p>上塩治横穴墓群は、236 基以上の横穴墓から成る県内最大の横穴墓群である。今回は、遺跡北部に隣接して立地する、第3支群・第40支群の一部を調査した。</p> <p>第3支群においては新発見となる 20 号横穴墓を調査し、造墓途中の横穴墓であることを確認した。第40支群においては 35・36 号横穴墓を調査し、いずれも須恵器編年出雲 4 期の横穴墓であることを確認した。今回の調査をもって、第3・40支群に残存していた、全ての横穴墓の調査を終了することとなった。両支群において発見された横穴墓の数は、第3支群 20 基、第40支群 36 基、計 56 基となる。</p>					

出雲市の文化財報告 44  
令和元年度出雲市文化財調査報告書

**東原遺跡  
上塙治横穴墓群  
(第3支群・第40支群)**

2020年3月

編 集 出雲市市民文化部 文化財課  
〒693-0011 島根県出雲市大津町2760番地  
TEL (0853) 21-6618

発 行 出雲市教育委員会  
〒693-8530 島根県出雲市今市町70番地  
TEL (0853) 21-6874

印刷・製本 有限会社 西村印刷

